人の心と家

本当に欲しい家を手に入れるために、こんな手法もある

連（むらじ） 健夫（建築家）

プロフィール
1956年京都生まれ。多摩美術大学、東京都立大学大学院修了後、10年間ゼネコンで設計実務に携わる。91年、イギリスのＡＡスクール（建築学校）に留学。東ロンドン大学非常勤講師などを務め、96年に帰国。連健夫建築研究室を主宰する傍ら、海外の建築家とのワークショップを行なっている

自分でもわからない「本当に欲しい家」

自分が本当に建てたいのはどんな家なのか。はっきりしたイメージを持っている人は少ない。だからいざ家を建てるとなると、モデルハウスめぐりをしたり、住宅雑誌をめくったりして「私が住みたい家探し」を始めることになる。しかし、見れば見るほど目移りするばかりで、はっきりしたわが家のイメージはいっこうに浮かんでこない、ということになりがちだ。

建築家のなかには、打合せに入る前に家族全員に「家づくりの問診票」を渡して記入してもらう方法をとっている人もいる。生活時間帯、趣味、所持品の量、新しく建てる家に望むことなどを率直に書いてもらって家づくりのベースにするのだ。問診票に記入する作業は、改めて自分の生活を振り返り、新しい家に何を求めているのかを自分なりに考えるキッカケになる。確かによい方法には違いないが、その人が何を本当に心地よいと感じるかを言葉で表現するのはなかなか難しい。

求めている心地よさをコラージュで表現する

建築家の連健夫さんは住宅を設計する際、建て主が本当に建てたい家を探り当てるために、ユニークな方法を用いている。それは心理療法にも用いられているコラージュの手法。古い雑誌やカレンダーなどに印刷された写真や絵の中から、気持ちがいい、すばらしい、面白いなど、自分が心引かれたものを切り取って集めておき、大きな紙に張り合わせて、一つの画面を構成してみるのだ。家や室内の写真にとらわれず、自由に発想の翼を広げて、自分が快いと感じるもの、好きなものを見つけ、視覚的に表現する。

「建て主がふだん意識していない心の奥の夢や希望や創造性を導き出すために、この手法は有効なんです。コラージュの画面には、家族それぞれの個性の違いがはっきり出ますよ」

例えばどんなコラージュができるのだろう。連さんはある家族が作ったコラージュを見せてくれた。夫婦と子供二人の家族四人が、それぞれの思い入れをもって画面を構成している。家を建てた当時小学六年生だった長女のコラージュには森や渓流の写真がふんだんに使われていて、木もれ日やすがすがしい空気を感じさせる。弟の作品はロケットや人体模型などが登場して自由奔放。写真の扱いも大胆で、切り抜いてあったり、斜めに張ってあったりする。

家づくりのプロセスを住まい手も楽しむ

一方、お母さんのコラージュには陰影のある回廊や土間、塗り込められたような厚みのある白など、どこか地中海の雰囲気がある。そしてお父さんはといえば、「アーチやアースカラーの厚い壁など、こちらも地中海風のイメージがありますが、奥さんのコラージュと違って写真の張り方がシンメトリカルで、規則正しいですね」と連さんが

指摘するように、画面の中心から左右対称にきちんと写真を張っている。余白も多い。

選んだ写真だけでなく、その写真を使って画面をどう構成しているかにも個性が表れる。言葉を介しての「打合せ」からは見えてこない住まい手の個性や家に求めるイメージを、コラージュがあぶり出してくれるのだ。

家族がそれぞれに描いたイメージと現実の条件との折合いをつけながら一軒の家をまとめあげるのは設計者の仕事になる。

「まず、コラージュを見て、この家族がどんな生活を求めているのか、感じ取るようにしています。次にコラージュから引き出されたキーワードに基づいて模型をつくり、建て主と話し合いながらプランをつくっていきます」

前述の四人家族のコラージュから発想された家は、「ツリーハウス」と名づけられた。家の中央を太い木の幹のような螺旋階段が貫き、階段の周囲には幹につく枝葉のように各部屋がレベルを変えながら配置されている。幹の最上部にあるトップライトからの光が、木もれ日のような陰影をつくり出す。螺旋階段にも子供部屋のはしごにも、ジャングルジムのような楽しさがある。アースカラーの玄関土間やアーチ型の扉にはどことなく地中海の匂いもある。

家族四人は、自分たちが求めている家を見つけることから始めて、それが形になっていくプロセスを楽しんだ。そして、出来上がった家の中で、イキイキと暮らしている。

形ではなく心からスタートする家づくり

「家づくりには、いろいろなやり方があると思います。コラージュはその一つ。ほかにも自由連想など住まい手の状況に応じて適切な方法を用いています。」

連さんは「創造性」について考え、自分なりに学ぶうちに、ユングに突き当たったという。

「無意識のなかにあるものを意識化するのが創造力であるとユングは言っています。意識化するためには手がかりが必要なんですが、その手がかりとしてプレイセラピーや箱庭療法、そしてコラージュなどがあります。創造力を使って心の病を治そうというわけですね。建て主にコラージュを作ってもらうのはユング心理学的なアプローチを住宅設計に応用したらどうなるか、という試みなんです」

連さんがこの手法で設計した最初の家はアメリカ人英語教師の週末ハウスだった。彼のコラージュにあふれる豊かな色彩、夕焼け、輝く湖面、有機的な曲線を描く植物などのイメージが基になって、カーブした屋根とグリーンの外壁を持つ週末ハウスが誕生した。

住まい手がコラージュしたイメージを消化し、専門家が建築に翻訳する。このやりかたは連さんも言うように一般的なものではない。しかし、形から入ってしまいがちな家づくりを、形ではなく心の中を見つめることからスタートするという発想は、どんな家づくりにも応用できるのではないだろうか。

「建物ということにこだわらずに、ふだん読んでいる雑誌や広告などの中から気持ちよさそうな写真、好きな写真を切り抜いておけばいいんです」

家づくりを考えているのなら、一度コラージュを試してみてはどうだろう。集めた写真を並べてみたとき、自分が本当に望んでいる生活が見えてくるかもしれない。

topics

財形融資金利はダウン 大いに活用を

2.0%と史上最低を記録した金融公庫の基準金利は、昨年暮れから徐々に上がり、この7月からは、2.6%に上昇している。都銀各行も、今年6月に過去最低水準になった後は上昇傾向にあり、9月現在、第一勧銀の場合では5年物固定金利は2.9%、10年物では3.8%となっている。一方財形住宅融資の金利は、7月1日から1.75%（5年間固定）と最低に。「建築費用の8割以内」という制限はあるが、貯蓄残高の10倍（最高4000万円）までの融資が受けられる。財形貯蓄をしている人は、大いに活用したい。